

## 河越重頼の妻と妹―鎌倉初期の河越氏をめぐる一齣―

木村 茂 光

### はじめに

細川涼一氏の仕事に「河越重頼の娘―源義経の室―」という論文がある。<sup>(1)</sup>副題にあるように、源義経に嫁いだ河越重頼の娘を縦糸に平安時代末期―鎌倉時代前期の河越氏の動向を丁寧に追究した好論である。本稿は、細川氏の仕事と比べられるほどのものではないが、氏の懇みに倣って、河越重頼の妻と妹とを取りあげることによって、細川氏とは違った視角から当該期の河越氏について考えてみることに目的がある。

このことを考えるに至った要因は、最近、平安末期の河越氏と河越荘について考える機会を与えられたことである。<sup>(2)</sup>そこでは、久寿二年（一一五五）に武蔵国比企郡大蔵で起こった大蔵合戦前後の河越氏に動向について、源頼朝の乳母で、武蔵国比企郡に下向し流罪中の頼朝を経済的に援助したといわれる比企尼の娘と重頼との婚姻関係や、河越荘立荘をめぐる要因などについて検討を加えた。

その際、十分に取り上げることができなかったのが、本稿の題名にある「河越重頼の妻と妹」についてである。詳細は以下で検討するが、鎌倉初期、源義経事件に縁坐した重頼が誅され遺領が没収されるという事件が起き、<sup>(3)</sup>本領の河越荘の存続も危機に陥った時、それを最終的に守ったのが重頼の妻であった。彼女は、先に記したように比企尼の次女であったから、『吾妻鏡』の記事などでよく知られている。

もう一人の重頼の妹とは児玉党の一族の小代行平の妻になった女性で、史料では「河越（ノ）尼御前」と出てくる。彼女については後で紹介する「小代伊重（宗妙）置文」（鎌倉末期ないし南北朝期に成立）に記されており、<sup>(4)</sup>それによると小代氏に嫁ぎながらも、河越氏の危機に際してその存続のために行動していることが知られる。

前記のように、鎌倉初期の河越氏は重頼が義経事件に縁坐して（文治元年（一一八五）以後衰退していたと考えられ、嘉祿二年（一二二六）、河越重頼の息子重員が「武藏国留守所総檢校職」に復活するまで<sup>(5)</sup>はその動向は不明である。したがって、この「重頼の妻と妹」の行動は当該期の河越氏の存在形態を知ることができる貴重な史料になると考える。

以上のような問題関心から、「重頼の妻と妹」に関する史料を紹介しつつ、鎌倉初期の河越氏の一齣を復元することを試みたいと思う。

## 一、平安末期～鎌倉初期の河越氏

まず、「重頼の妻と妹」の歴史的環境を理解するために、平安末期～鎌倉初期の河越氏の動向を確認しておきたい。<sup>(6)</sup>

河越氏は秩父平氏の嫡流であったが、先に記した大蔵合戦で、源義賢と組んだ秩父重隆とその子葛貫能隆（河越重頼の父）が源義朝の子義平に敗北し、秩父平氏一族は大きな混乱に陥ったが、その時期は不明ながら、重隆が所持していた「武蔵国留守所総檢校職」は無事孫の重頼に受け継がれた。重頼は平治の乱後武蔵国を支配した平氏（国守平知盛）とも連携し、後白河院が建立した新日吉社領として河越荘を立荘させている。また、時期や場所はわからないが、先述のように重頼は源頼朝の乳母であった比企尼の次女と婚姻関係を結んでいる。その縁で、重頼は伊豆流罪中の頼朝を助けるために武蔵国比企郡に下向した比企尼を経済的に援助していたと思われる。一方、河越氏と児玉党との婚姻関係も深く、重頼の父能隆は児玉党から嫁を娶っているし、重頼の妹は児玉党の一族小代氏の行平に嫁いでいる。このような関係から、前稿では大蔵合戦後の混乱のなから河越氏が復活してきた要因として、児玉党・小代氏との婚姻関係の深さを想定した。

その後頼朝の挙兵にあたっては、平治の乱以後、武蔵国が平氏の知行国となり、その軍制に組み込まれていたこともあって、河越氏は最初、同族の江戸氏、畠山氏らとともに頼朝の武蔵国入りに抵抗した。しかし、同じ秩父平氏で以前から頼朝に与っていた葛西氏、豊島氏らの説得があったためと考えられるが、秩父平氏がこぞって頼朝に味方することになった。

そして、元暦元年（一一八四）、重頼の娘が、母が比企尼の次女であったことによると思われるが、義経と結婚するために上洛した。<sup>7)</sup>『吾妻鏡』はこの結婚が頼朝の「兼ねてからの約諾」であったと記している。このように、頼朝挙兵後の河越氏は頼朝政権下で重要な位置を占めることになったのである。

しかし、このような河越氏を奈落の底に落としたのが義経と頼朝との不和の勃発である。これについては詳し

くは触れないが、ついには義経の追討さらには義経を匿ったことを口実とした奥州合戦にまで展開したことは周知の事実である。そして、この義経事件に縁坐して河越重頼もまた失脚したことは先述のとおりである。

重頼失脚後の河越氏の動向はあまりよくわからないが、これまた先述のとおり、北条執権体制のもとで、嘉禄二年（一二二六）、重頼の子の重員が重綱以来伝領してきた武蔵国留守所総檢校職に任命され、武蔵国における河越氏の地位は復権されたのであった。

以上、平安末期から鎌倉初期にかけての河越氏に関する概観である。これを前提に本題の「重頼の妻と妹」について考えてみることにしたい。

## 二、重頼の妻と河越莊

先述のように、河越重頼の妻は比企尼の次女である。両者の結婚がいつどのような契機で実現したかは不明であるが、前稿では、両者の結婚の時期を一一六五年前後と推定し、そのころ武蔵武士団は平氏政権の下で大番役等に駆り出されていたから、重頼もその一人として在京していたところに比企尼との接点があり、それが契機で結婚に至ったのではないかと推測した。平氏政権下の武蔵国で、平氏武士団に編成され、国守平知盛の働きかけもあって新日吉杜領河越莊を立莊することができた重頼が、流罪中の頼朝を援助するために武蔵国へ下向した比企尼の娘との結婚を企図するとはどうしても考えられないからである。

この点はさておき、重頼の妻と河越莊に関連する史料を紹介しよう。

A…『吾妻鏡』文治二年（一一八六）七月二八日条

七月廿八日癸卯、帥中納言<sup>（吉田経房）</sup>の奉書到来す。新日吉領武藏国河肥庄<sup>（越）</sup>の地頭、去々年の乃貢を対捍する事、ならびに同領長門国向津奥庄武士狼藉の事、庄家の解状を取りこれを下さる。早く尋ね成敗せしめ給うべきの由、これを載せらる。去ぬる六月一日の御教書なり。向津の事は相尋ぬべきの趣、当座においては直ちに下河辺庄司行平に仰せ含めらる所なり。河肥の事は請所なり。但し領主幼少の間、請料の如きの事殊に不法の事あらんか。別して奉行人を差して、厳密に弁じ致さしむべきの旨、御書<sup>（平賀義信）</sup>を武藏守の許に遣さると云々。俊兼奉行すと云々。

B…『同』文治二年八月五日条

八月五日己卯、帥中納言の奉書について、御請文を進ぜらる。是新日吉社領武藏国河越庄の年貢の事、ならびに長門国向津奥庄の狼藉の事等なり。平五盛<sup>（北条）</sup>時筆を染むと云々。

六月一日の御教書、七月廿八日に到来す、謹んで拝見せしめ候いおわんぬ。新日吉御領武藏国河肥庄の事、もとより請所として御年貢を進ぜしめ候の所なり。而して去年領家逝去せしむるの由承り候によって、年貢を進ずべきの所を知らず候。依て領家を相待たしめ候の間、彼の年の年貢自然に罷り過ぎ候いおわんぬ。地頭恣まに抑留の儀にあらざ候か。而して今前の領家の孫禪師君をもって領家となすべく候わば、早くその旨を存知せしめ、年貢を沙汰し進ぜしむべく候の由、地頭に下知せしむべく候。（中略）この旨を以て便宜の時、洩らし達せしめ給うべく候。頼朝恐惶謹言。

八月五日

頼朝裏花押

C…『同』文治三年一〇月五日条

五日壬申、河越太郎重頼、伊予前司（源義経）義顕の縁坐に依りて誅せらるゝと雖も、遺跡を憐愍せしめ給うの間、武蔵国河越庄においては後家尼に賜うの所、名主百姓等所勤に随わざるの由、風聞の説有るに就きて、向後庄務と云い雑務と云い、一事以上、彼の尼の下知に従うべきの由、仰せ下さる所也。

重頼の妻と河越荘との関係を直接示しているのは史料Cであるが、そこに行き着くまでの経緯を示しているのがAとBである。まず、A・Bの要点を河越荘関係に絞って示すと以下になるう。

A…帥中納言吉田経房からの問い合わせの書状と幕府の対応

- ① 河越荘は新日吉社領の荘園であった。
- ② その河越荘から領家へ納めるはずの「乃貢」＝年貢が去々年以来「対捍」＝未進されている。
- ③ 河越荘は「請所」で、地頭が所定の年貢納入を請け負う代わりに本家・領家の荘務への介入が認められていない所領であった。
- ④ 領主（この場合は河越荘の地頭）が幼少であったため、「請料」（納入すべき年貢の額）のことで不法があったかもしれない。
- ⑤ 別の奉行人を派遣してきちつと弁済するように、武蔵守平賀義信に命じた。

B…吉田経房の書状に対する源頼朝の返事

⑥河越荘はもとから請所として年貢を納入していた。

⑦ところが、去年領家が死亡してしまったため年貢を納入すべき先がわからず、新しい領家を待っているうちに納期が過ぎてしまった。

⑧したがって、地頭が勝手に年貢を抑留したわけではない。

⑨今度、前の領家の孫禅師が領家になると承ったので、そのことをよく存知し、年貢を納入するように、地頭に下知した。

これら史料A・Bからわかることは、河越荘が新日吉社領として継続していること、去々年以来年貢の対捍が生じているが、よく調べてみると、去年領家が死亡してしまい年貢の納入先が不明になったことが原因のようである。しかし、今度、新しい領家が決まったので、間違いなく納入するよう地頭に命じた、ということになる。

領家の死亡によって年貢の納入先が不明になるという事態も、領家が「家」に伝領されるのではなく個人に伝領されるものであったことを示唆しており、領家の性格を考える際興味深い事実であるが、この年貢対捍にはどうも別の要因があったように思われる。それを示しているのが史料Cである。Cの内容は、

河越重頼は源義経の縁坐によって誅されたが、残された人々を不憫に思った頼朝は河越荘を重頼の後家尼（比企尼の次女）に賜ったところ、名主・百姓らが後家尼の支配に従わないという風聞があったので、今後は莊務も雑務も一切後家尼の命令に従うよう仰せ下した。

という内容になる。まとめると、

①頼朝は、不憫に思い重頼の遺領河越荘を重頼の後家尼に与えた。

②しかし、名主・百姓が後家尼の支配に従わないという事態が生じた。

③そこで頼朝は莊務も雜務も一切後家尼に任せ、その命令に従うように命じた。

となろう。A（文治二年）では年貢の未進が指摘され、C（文治三年）では名主・百姓らの抵抗があったことが指摘されている。一年の違いはあるものの、両者になんらかの関係があったと考えるのが順当であろう。

そこで改めて史料Cをみると、このCの内容がすべて文治三年一〇月五日に起こったかのように読むことができるが、それは違う。なによりも、史料Cの前に史料A・Bが存在するし、さらに重頼が義経の縁座によって誅され遺領が没収されたのは文治元年（一一八五）十一月二日のことで、その時の記事には「その内伊勢国香取五ヶ郷は大井兵三次郎実春」が賜り、「その外は重頼の老母」が預かったと記されていたからである（史料D）。<sup>8</sup>すなわち河越荘はまず「重頼の老母」が預かったのであって、Cのように重頼の後家尼が直接賜ったわけではない。この事実と史料A・Bを合わせて考えると、史料Cの内容はかなり時間の経過を圧縮して記されていると考えざるを得ない。

そこで改めて史料A・Dを、河越荘の伝領関係に絞って時間軸に沿って整理してみると次のようになろう。

①文治元年十一月二日―重頼の遺領河越荘が重頼の老母に預けられた。

②文治二年七月二八日―領家への年貢未進問題が起こったが、その時領主Ⅱ地頭は幼少であった。

③文治三年一〇月五日―河越荘は重頼の後家尼が賜った。しかし、名主・百姓がその支配に従わなかったの

で、莊務も雜務も一切後家尼に任せることにした。



やはり問題は①と③の内容の齟齬である。解決策は二つである。一つは①の「老母」は「後家尼」の間違いとすること。二つ目は③の最初の「後家尼」は「老母」の間違いとすること。どちらの可能性もあるが、ここでは史料Dを尊重して二つ目の理解を採用して考えてみたい。

すなわち、河越荘は文治元年重頼の老母が預かり、その後重頼の幼少の遺児を地頭に立て老母（遺児からみれば老祖母）は後見となった。しかし、老祖母後見―幼少の地頭という体制では支配に実効力が伴わず、名主・百姓が支配に従わないという事態が生じた。それで頼朝（幕府）は、文治三年、老祖母―幼少の地頭に代わって、莊務・雑務一切の支配権を後家尼に任せることにした。<sup>(9)</sup> 以上である。

このように考えることが可能だとすると、史料A・Bで問題になっている年貢の未進問題も別の理解が可能になる。史料Cをそのまま読むと、名主・百姓の抵抗は後家尼が支配権をもった後に起きたことになるが、私の先のような理解に立つならば、名主・百姓の抵抗は老祖母―幼少の地頭の時期に起こったことになるからである。

確定はできないが、河越荘の年貢未進の背景には地頭が幼少であったことや領家が死亡してその所在が不明であったという事情があったかも知れないが、一方では幼少の地頭―老祖母の後見という支配体制に名主・百姓らが不満をもち、その命令に従わなかったという事態が起こっていたとも考えられる。だからこそ、頼朝は今後このようなことが起きないように、「向後、莊務と云い雑務と云い、一事以上、彼の尼の下知に従うべし」という命令を下したのであろう。

なにはともあれ、以上のように、重頼の妻が地頭職に任ぜられることによって、河越氏の本領河越荘は無事危機を乗り切り、存続することになったのである。

もちろん、重頼が誅された後、本領の河越荘の支配を最終的に重頼の妻Ⅱ後家尼に託したのは、彼女が頼朝から覚えの高い比企尼の次女であったからという解釈も成り立つが、後継者が幼少の時、その家を支え、遺領を維持していく役割を担ったのはやはり妻であり、妻の力が必要であったという評価も可能ではないだろうか。史料Cの頼朝の判断には、比企尼の次女だからというような個人的な関係よりも、河越氏の危機に際しそれを克服するために妻の位置や役割を重んじなければならないという価値観が入っていたと思われるのである。

### 三 小代氏と重頼の妹Ⅱ河越尼

次は兄玉党の一族小代氏（行平）に嫁いだ河越重頼の妹についてである。史料には「河越ノ尼御前」と記されているので、以下、河越尼とする。

その河越尼の動向について記しているのが、次の「小代伊重（宗妙）置文」である。この置文は「小代八郎行平注置条々」という題をもっていることからわかるように、行平の四代後の孫伊重が先祖の行平に関する事柄を書き記したもので、一四世紀一〇～二〇年代に書かれたという。<sup>10)</sup>

そして、この置文の最後に「兄玉系図」が付されており、置文の中心な人物である行平の子弘家には、

母葛貫別当平義隆女、河越太郎重頼妹也、

という注記があった。「葛貫別当平義隆」とは重頼の父葛貫能隆のことであるから、小代行平の妻Ⅱ河越尼が葛貫能隆の娘で河越重頼の妹であることは間違いないまい。

河越尼について記してある置文の内容は後に検討するとして、まず、この置文について、石井進氏の仕事に基づいて紹介しておこう。

「置文」は九箇条からなり、石井氏の整理によれば、一―四は行平の勲功、五は行平の曾祖父弘行の功績に始まり、その後の小代家の衰微、六は小代の岡の屋敷の御霊のこと、七は行平の給わった重要書類の行方に関すること、八は後三年合戦絵巻に描かれた行弘の功業、九は伊重がこの置文等を記した理由、となるという。

その上で石井氏は、八の冒頭部分には明らかな欠脱があることから、何箇条が失われている可能性、さらに全体の排列がこのままでよいのか、多少の疑問があることを指摘しながらも、

私は内容、文体、用語、（略）捨て仮名の多用や、宣命体などの書記形式、そして他の史料との比較対照などから考えて、この置文を鎌倉時代末期のものとして十分使用に堪えるものと判断している。

と述べている。私も石井氏の評価に立って以後の論述を進めることにしたい。

さて、肝心の河越尼が登場するのは第七の「行平の給わった重要書類の行方に関すること」の中である。早速その文を紹介しよう（石井氏が付したひらがなの傍注は適宜略した）。

一、此ノ段ハ小代ノ古老ノ人々ノ語ヲ被ルニ就テ、宗妙<sup>(みる)</sup>見ヲ注置ク、小代八郎行平、鎌倉ノ右大将ノ御料ヨリ充給ハ被ル、所ノ数通ノ御下文・御教書、不思議ノ御状等ノ事、行平皆ナ以テ妻女河越ノ尼御前ノ許ニ預ケ置カ被ル間、行平他界ノ後子、家嫡ヲ相ヒ継ガ令ル小代小次郎俊平宗妙<sup>(もと)</sup>仁和曾祖父、行平預ケ置カ被御下文・御教書・御状等ヲ河越ノ尼御前ニ乞ヒ奉マツリ給ヒケレドモ、正文ヲモ案文ヲモ終ニ出シ給ハザリケル

事、河越ノ一門ヲ養セ被レケル間、彼ノ養子ニ給ヒ与<sup>(あた)</sup>可キ所存ニテ有ケル由ヲ語被キ、凡先段ニ申右大將ノ御料ノ御下文・御教書・御状等ヲ搜索メテ持ツ可也、其故ヘハ、御下文・御教書等ハ、彼ノ地ヲ當時知行セネドモ、恩賞ニ預カル事モ有ラン時ハ、望ミ申タキ子細モ有可シ、又色々ノ不思議ノ御状等ハ、当世ノ人々ハ存知セ被レヌ事モ有ル可キ上ヘ、重代奉公ノ名誉ヲ顕サンガ為メニモ、尤モ上ノ見参ニ入レタキ者也、又大將ノ御料御隠<sup>(かくれ)</sup>以後、行平充テ給ハ被ル所ノ数通ノ御下文等モ、行平皆ナ<sup>(もつ)</sup>以妻女河越ノ尼御前ノ許ニ預ケ置カ被ケル間、是又正文ヲモ案文ヲモ終ニ以出シ給ハズ、爰ニ右大將家以後ノ御下文等之内、建仁三年ノ御下文三通ノ正文ハ、小代三郎左衛門入道法名道念跡ニ有ル間、案文ヲ写シ置ク者也、

内容を要約すると以下ようになる。

小代の古老の話として、小代行平は源頼朝から給わった数通の御下文・御教書など重要文書はすべて妻女の「河越ノ尼御前」に預けていた。行平の死亡後、家嫡を継いだ俊平は行平が預けた重要文書を河越尼に返却を請うたが、正文も案文も返却してもらえなかった。その理由は、河越尼が河越の一門の面倒をみており、河越の一門の一人を養子としているので、その養子にこれら重要文書を与えるつもりだからである、ということであった。これら重要文書は正文でも案文でも探し求めてもつていなければならない。何故なら、下文や御教書に記載された土地は、たとえ現在知行していなくとも、恩賞に預かるような時には望み申す材料になるからだ。また、頼朝公からいただいた感状は現在の人々が知らないことも書いてあるかも知れないが、重代奉公の名誉を顕すためにも、上の見参に入れたいものだからである。また、頼朝公が亡くなって以後に行

平が給わった数通の下文も河越尼に預け置かれたため、正文も案文もついに返してもらえなかった。ただ、建仁三年の將軍家下文三通の正文は小代三郎左衛門入道の子孫がもっていたので、案文を作っておいた。

この条文の本意は、後半に縷々記されているように、恩賞や重代の奉公の名誉を保障するはずの小代氏に伝わる証拠文書の少なさの理由と証拠文書の重要性を確認する点にあるが、その少なさの要因が行平の妻の「河越ノ尼御前」の行為に求められていることは注目してよい。

これによると、小代行平は頼朝や幕府から給わった重要文書を妻に預けていたこと、そして夫の死後も妻はその管理権をもっており、重要文書を嫡子に譲らなかったことがわかる。妻の家内財産に関する強い権限を見て取ることができよう。詳細は別の検討に委ねるしかないが、時代は遡るが、平安中期の「新猿樂記」<sup>(1)</sup>に記された三人の妻のうち、家政権を掌握していた二番目の妻が衣・食・住だけでなく、「馬鞍・弓・胡籥・従者・眷属」に対する権限までもつていたことが想起される。

私が注目したのは、このような後家の家政における権限の強さもさることながら、河越尼が、夫行平の残した重要文書を河越氏から迎えた養子に伝領しようとしたことである。置文の本文には次のように記されている。

河越ノ一門ヲ養セ被レケル間、彼ノ養子ニ給ヒ与可キ所存ニテ有ケル由ヲ語被キ、

石井氏はこの部分を次のように要約している。

何故なら尼御前は河越の一門の一人を養子としており、これら重要書類はその養子に与えるつもりであったからだということだ。

あくまでも石井氏の文章は「大意」なので異を唱えるのは差し控えなければならないかもしれないが、本文に

は「河越ノ一門ヲ養セ被レケル間、彼ノ養子ニ給ヒ与可キ所存」と明記されているのであるから、「河越の一門の一人を養子としており」とまとめることはできないように思う。本文を素直に訳すならば、「河越氏の一門を養っているので、彼（河越氏の一門）の養子に（重要文書）を与えるつもりなので」とすべきであろう。私は「河越ノ一門ヲ養セ被レケル間」という文言に注目したのである。もしこの事態が本当であるならば、河越氏はどういう状況に陥っていたのであろうか。

置文は、河越尼がこのような行動をとったのは「行平他界ノ後チ」のこととしている。小代行平は承元四年（一二二〇）に所領を嫡子俊平に与えた譲状<sup>12</sup>を残しているので、この話は少なくとも承元四年以降のこととなる。前節でも検討したように、河越重頼は義経事件に縁坐して誅され遺領が没収されたのは文治元年（一一八五）一月一二日のことで、翌文治二年の河越荘に関する史料には当時「領主幼少」であったことが記されていた。したがって、「領主」＝重頼の息子は承元四年段階では少なくとも三〇歳前後に成長していたことは間違いないであろう。

このことは次の事実によっても裏付けられる。というのは、この幼少の領主と推定される重頼の嫡男河越三郎重員が武蔵国留守所総検校職に補任され、河越氏の武蔵国留守所総検校職が復活するのは嘉禄二年（一二二六）であった<sup>13</sup>。そしてその重員は貞永元年（一二三二）に総検校職を息子の重資に譲っているからである。この譲与の時の重員の年齢を五五歳前後と考えると、承元四年当時の重員は三二歳前後であったことになる。

嫡男が少なくとも三〇歳を越える年齢に達していたにもかかわらず、小代行平の妻＝河越尼が河越氏の一門の誰かを「養子」として「河越ノ一門ヲ養セ被レケル」というのはどうみても不自然である。

これ以上は推測になるが、本節の最初に述べたように、この条文が小代氏に重要文書が伝領されていないことを説明するために記された可能性があるとすれば、河越尼の上記のような行為も「行平他界ノ後チ」というような厳密なものではなく、河越氏が危機に瀕していた時、自分の本家である河越氏を救済すべく（河越ノ一門ヲ養セ被レケル）さまざまな行動をとったことを表現したものと考えることができないのではないだろうか。その行為の一つに「河越の一門から養子を取ろうとした」ということもあったかも知れない。

もしこのような想定が可能であるとするならば、河越氏が危機にあつて彼女が河越氏を救済しようとしたのは何時であろうか。それは、第一節・二節の内容から考えて、やはり重頼が義経事件に縁坐して誅され遺領が没収された文治元年、そして河越荘の年貢未進問題が起き、最終的に重頼の妻Ⅱ後家尼が頼朝の判断により河越荘地頭職に任命された前後が一番可能性があらう。

小代氏に嫁いだ妹であつたが、嫡男の兄が誅せられ、その跡を老母と幼少の甥が継いだものの一族の態勢が安定しない危機をみて、嫁ぎ先の重要文書を確保し、実家から養子を入れるなどして、実家を援助しようとしたのであつた。

小代氏に河越氏から養子が入ったこと、小代氏の重要文書が河越氏に伝わっていることなど、現在では確定できないことが多く、どこまで信用できるか心許ないことも多いが、先述のような石井氏の評価もあり、かつ置文第六条に記されている小代氏と源義平との関係―大蔵合戦の際義平が小代氏の「岡ノ屋敷」に「御屋形」を構えたので、その後小代氏は義平を「御霊」として祀り、将来まで崇敬するように言い伝えられた、という話―は現在においても小代氏の館跡に御霊神社があることなどによって、その信憑性は確かめられるから、それなりに当<sup>(15)</sup>

時の事実が反映されている考えてもよいであろう。

## まとめにかえて

以上、二節にわたって河越重頼の妻Ⅱ後家尼と重頼の妹Ⅱ河越尼について検討を加えてきた。中世における後家・尼の歴史的な評価についてまで立ち入る能力も余裕もないが、一族の危機に際しての妻と妹という立場の異なる女性が取った二様の行動については明らかにできたのではないだろうか。

後見老祖母と幼少の孫（河越尼からすれば子）の地頭という支配体制の危機に際して、彼らに代わって夫の遺領、一族の本領を守った妻Ⅱ後家尼の行動と役割。一方、嫡家の兄が誅され一族が存亡の危機に陥った時、嫁ぎ先に実家から養子を迎え、かつ自分の夫から預かっていた重要文書を跡継ぎには返却せず、その養子に与えることによって実家を救おうとした妹Ⅱ河越尼の行動と役割。ともに、当該期の女性の行動とその歴史的役割を明瞭に示しているといえよう。

中世社会における女性の地位については、近年研究の進展にめざましいものがあるが、本稿がその動向になんらかの寄与ができていれば幸いである。

## 注

（１）細川涼一「河越重頼の娘―源義経の室―」（『女性歴史文化研究所紀要』第一六号、二〇〇八年）。



(2) 「大蔵合戦前後の河越氏と河越荘」（河越館の会編『河越館の会 シンポジウム 報告書』二〇一五年）。

(3) 『吾妻鏡』 文治元年 十一月二日条。

(4) 石井進「武士の置文と系図―小代氏の場合―」（初出一九八六年、『石井進著作集』第五卷、岩波書店、二〇〇五年）。本稿では『著作集』に引用された「置文」を使用した。

(5) 『吾妻鏡』 嘉禄二年四月一〇日条。そこには「十日甲午、河越三郎重員、武蔵国留守所総檢校職被補之、是先祖秩父出羽權守以来、代々補来云々」とある。

(6) 以下の叙述は、落合義明「武蔵国と河越氏」（『中世東国の「都市的な場」と武士』山川出版社、二〇〇五年）、細川注1論文、拙稿注2、などを元に行っている。

(7) 『吾妻鏡』 元暦元年九月一四日条。

(8) 注3、『吾妻鏡』 文治元年 十一月二二日条。D:「今日。河越重頼所領等被<sub>二</sub>収公<sub>一</sub>。是依<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>義経縁者<sub>一</sub>也。其内。伊勢国香取五ヶ郷。大井兵三次郎実春賜<sub>レ</sub>之。其外所者。重頼老母預<sub>レ</sub>之。又下河辺四郎政義同被<sub>レ</sub>召<sub>二</sub>放所領等<sub>一</sub>。為<sub>二</sub>重頼聲<sub>一</sub>之故也。」

(9) ただ、史料Cに「向後庄務と云い雑務と云い、一事以上、彼の尼の下知に従うべきの由、仰せ下さる所也」と記されていることが気になる。老祖母―幼少の地頭が「庄務」を、後家尼が「雑務」というように、最初は任務を分掌していた可能性もあるかもしれない。

(10) 石井注3論文参照。「置文」の評価および内容の「要約」については、この論文に拠っている。

(11) 山岸徳平他編『古代政治社会思想』（『日本思想大系』8、岩波書店、一九七九年）所収。

- (12) 承元四年三月二十九日沙彌行蓮（小代行平）讓狀（『鎌倉遺文』第三卷、一八三二号）。
- (13) 注5。『吾妻鏡』嘉祿二年四月一〇日条。
- (14) 『吾妻鏡』貞永元年一二月二三日条。
- (15) 『川越市史』第二卷、中世編（一九八五年）、石井注3論文など。